



賢く 優しく 逞しく

2月号・令和6年2月1日発行

本校URL <http://musashimurayama.ed.jp/mmced5c/>

武蔵村山市立第五中学校

当たり前が幸せ

校長 榎戸 千代子

厳しい寒さも峠を越し、「春」を迎えようとしています。暦の上では、2月4日（日）が「立春」、その前日の2月3日（土）が「節分」です。

「節分」は、冬の終わりの日で、翌日から新しい季節が始まる区切りの日となります。昔の人々は、「季節の変わり目は邪気が入り込む」と考えていたので、「節分」は、邪気を追い払って幸運を呼び込み、無病息災を祈る伝統行事として行われてきました。



平安時代には「散米」と称して、米をまく風習があったそうですが、室町時代には形を変えて、「豆」をまくようになったといわれています。「豆＝魔目（鬼の目）」を滅ぼす（魔滅）ことに由来されているという説があります。無病息災を願うのは、いつの時代も変わりません。当たり前の日々が実は貴重な毎日なのかもしれません。一日一日を大切に過ごしてもらいたいと思います。

最大震度7を観測した能登半島地震の発生から1か月が過ぎました。被災地では、激しい揺れや津波により、建物の倒壊、地割れや地面の陥没が多発し、広範囲で水道管の破断が生じているといわれています。厳しい寒さや降雪、降雨の影響もあり、ライフラインの復旧もなかなか進まないようです。

一次避難所で生活している方はまだ1万人を超え、床に段ボールやマットを敷き、毛布にくるまって雑魚寝。周囲の人の騒音で寝付けず、赤ちゃんの泣く声が迷惑になるなどの理由で仕方なく被災家屋に戻った人や車中泊をしている御家族もあるようです。

そんな中、輪島市、珠洲市、能登町の中学生の「集団避難」のニュースがありました。学習機会を確保するため、約2か月を想定して、親元を離れての生活です。特に、受験を控えた3年生とその保護者にとっては不安の中、苦渋の決断だったことでしょう。受験生の合格を祈るばかりです。

同様のことが東京で起きたら……。人々の生活は？ 避難先は？ 中学生は？ などと、いろいろと考えさせられます。私たちは今まで日本各地で起きた大地震のたびに、学んできていることがあるはず。災害への備え、避難訓練、避難後の生活など、様々なことを想定して、各家庭、地域、学校でやっておくことなどをもう一度見直し、強化していかなければなりません。本校でも来年度はより現実的な訓練を進めてまいります。今、東京に住んでいる私たちは、日常の生活が送れていることを有り難く思います。被災地の皆様の一日も早い復興をお祈りいたします。

先日、3年生の音楽の授業を参観する機会がありました。「最後の合唱を創り上げよう」という目標のもと、卒業式で歌う予定の混声四部合唱曲「群青」のパート練習の様子を見ました。

この曲は、東日本大震災の被害を受けた福島県南相馬市の小高（おだか）中学校、平成24年度卒業生と音楽教諭の手によって作られたものです。この中学校は、福島第一原子力発電所、半径20km圏内にあります。平成24年度の卒業生は、大震災当時中学1年生でした。106名いた生徒のうち、2名が津波で亡くなり、97名が北海道から長崎まで全国各地に避難し、学校を再開した時には7名になっていたそうです。「群青」は、この学校のカラー、象徴であり、皆の「絆」を表すそうです。離ればなれになってしまった仲間を想い、同じ空の下で頑張っている友といつか再会できる日を信じて、日頃つぶやいたり、書き留めたりした言葉を音楽教諭がまとめ、曲を付けました。歌詞の中に、♪あの日見た夕陽 あの日見た花火 いつでも君がいたね あたりまえが 幸せと知った♪ という歌詞が出てきます。偶然ですが、今回の能登半島地震のことと重なって、歌詞を読み、曲を聴くたび、涙があふれてきます。

卒業式当日はこの「群青」を、3年生（卒業生）が、第五中学校で仲間と共に学び、共に過ごした3年間の想いを込めて歌ってくれることを楽しみにしています。